

Title	現代インド語の動詞「過去形」の機能 : Hindi, Urdu, Bengaliについて
Author(s)	溝上, 富夫
Citation	大阪外国語大学学報. 23 p.83-p.100
Issue Date	1971-01-30
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80385">https://hdl.handle.net/11094/80385</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 現代インド語の動詞「過去形」の機能

—Hindi, Urdu, Bengali について—

夫 富 上 溝

## Functions of the Past Forms of the Verbs in Neo-Indo Aryan Languages

—with reference to Hindi, Urdu and Bengali—

Tomio MIZOKAMI

S. H. Kellogg has classified the verbal tenses of the Hindi language into fifteen categories, which are as follows<sup>1)</sup>:

Radical Tenses	(1) Contingent Future (2) Absolute Future (3) Imperative
Imperfect Tenses	(1) Indefinite Imperfect (2) Present Imperfect (3) Past Imperfect (4) Contingent Imperfect (5) Presumptive Imperfect (6) Past Contingent Imperfect
Perfect Tenses	(1) Indefinite Perfect (2) Present Perfect (3) Past Perfect (4) Contingent Perfect (5) Presumptive Perfect (6) Past Contingent Perfect

Radical Tense is the tense which is made from the Root.

Imperfect Tense is the tense which is made from the Present Participle.

Perfect Tense is the tense which is made from the Past Participle.

This classification is mainly based upon the forms, though the meanings, which the forms imply, of course, are not ignored.

Among these, nine tenses are connected with the Past.—i. e., Indefinite Imperfect, Past Imperfect, Past Contingent Imperfect, and all Perfect Tenses. We can also add the Past Progressive Forms.

Some of them are quite similar to those of English functionally, while the others are not. The aim of this paper is not to trace back the theme historically but to analyze the functions of the Past Forms of the contemporary Hindi as well as Urdu and Bengali.

## は　じ　め　に

S. H. Kellogg はヒンディー語<sup>2)</sup>の動詞時制を形態の上から、次の15の文法範疇に分類した。<sup>1)</sup>

### (1) 語根から作られるもの

① Contingent Future*	(Sambhāvyā Bhaviṣyat Kāl, <sup>3)</sup>	†aaūu <sup>4)</sup> )
② Absolute Future	(Sāmānya Bhaviṣyat,	†aaūugaa )
③ Imperative*	(Ājñādyotak,	†aa, <sup>5)</sup> † aao <sup>6)</sup> )

### (2) 現在分詞から作られるもの

① Indefinite Imperfect*	(Sāmānya Saṅketārth,	†aataa )
② Present Imperfect	(Sāmānya Vartamān,	aataa hūu )
③ Past Imperfect	(Apūrṇ Bhūt,	aataa thaa )
④ Contingent Imperfect*	(Sambhāvyā Apūrṇ Vartamān,	aataa hoūu )
⑤ Presumptive Imperfect*	(Sandigdḥ Vartamān,	aataa hūugaa)
⑥ Past Contingent Imperfect*	(Sambhāvyā Apūrṇ Bhūt,	aataa hotaa )

### (3) 過去分詞から作られるもの

① Indefinite Perfect	(Sāmānya Bhūt,	†aayaa )
② Present Perfect	(Pūrṇ Vartamān,	aayaa hūu )
③ Past Perfect	(Pūrṇ Bhūt,	aayaa thaa )
④ Contingent Perfect*	(Sambhāvyā Bhūt,	aayaa hoūu )
⑤ Presumptive Perfect*	(Sandigdḥ Bhūt,	aayaa hūugaa)
⑥ Past Contingent Perfect*	(Sambhāvyā Pūrṇ Bhūt,	aayaa hotaa )

これらのうち、「過去」に関連するものは、2)の①、③、⑥と(3)のすべてである。

また、ベンガル語では主に意味の上から、次のように分類される。<sup>7)</sup>

### (1) 未 来

① Simple Future	(Sādhāraṇ Bhaviṣyat Kāl, <sup>8)</sup>	††koribo <sup>9)</sup> )
② Future Progressive	(Ghaṭamān Bhaviṣyat,	korite thakibo)
③ Future Perfect	(Pūrāghaṭit Bhaviṣyat,	koriya thakibo)

### (2) 現 在

① Simple Present	(Sādhāraṇ または Nitya Vartamān,	††kori )
② Present Progressive	(Ghaṭamān Vartamān,	koriteci )
③ Present Perfect	(Pūrāghaṭit Vartamān,	koriyaci )

### (3) 過 去

① Simple Past	(Sādhāraṇ または Nitya Atit,	††korilam )
② Past Progressive	(Ghaṭamān Atit,	koritecilam )

③ Habitual Past (Nityavṛtt Atīt, ††koritam )

④ Past Perfect (Pūrāghaṭit Atīt, koriyacilam )

これらのうち、(3)はもちろんのこと、(1)の③と(2)の③も「過去」に関連してくる。

本稿の目的は、ヒンディー語、ウルドゥ語<sup>10)</sup>、ベンガル語<sup>11)</sup>について、その「過去形」の機能を対比させつつ明らかにすることである。

## I. Indefinite Imperfect と Past contingent Perfect

§1 現在分詞の形そのままであらわされる Indefinite Imperfect は Past Conditional ともいわれる<sup>12)</sup>が、頻度の点で「過去」の事実と反する事柄をあらわすことが一番多いけれども、「未来」や「現在」についても、「不可能性」または「非現実性」をあらわす。従って、英語のように Past Subjunctive と Past Perfect Subjunctive の区別はない。

(例) *əgər uske paas sāmāy hotāa to zəruur aataa.* は「今、彼に時間があるならば来るのに(来ない)」という意にも、「彼に時間があつたら来たのに(来なかった)」という意にもなり、Context によって判断せざるを得ない。

(例) *kiaa əcchāa hotāa ki kəuṣəl tumhāarii buddhi pər bhii əbhimaan kər səktaa.* (Jayaśānkar Prasād, 'Ajātaśatru')

(コーサラ国がお前の(「勇気のみならず」)知恵をも誇りうることができたのなら、何とすばらしかったことよ。)

§2 明らかに「過去」の事実と反する事柄をのべる場合は Past Contingent Perfect を用いる。過去分詞に *honāa* の現在分詞を加えたものであり、これが英語の Past Perfect Subjunctive に当る。Platts はこれもふくめて Past Conditional と称しており、<sup>13)</sup> また Pluperfect Conditional といういい方もある。<sup>14)</sup>

(例) *yədi aapne səphəltāapūrvək yeh kaam kiya hotāa to aapko inaam milāa hotāa.*

(もしあなたが首尾よくこの仕事をやっていたのだったら、あなたはほうびをもらえたのに。)

§3 Bengali では §1 と §2 のような条件文は Habitual Past を用いる。<sup>15)</sup>

(例1) *amar kaj ache noiṣe ami o tomader sōṅse jetum.* (C.) (Rabindranath Tagore, 'Gorā')

(私には仕事がある。そうでなかったら、君達と一緒にに行くのに。)

(例2) *jodi śāntiniketāner chatimṭolay śūye śōmśār theke mukto hote partam to boro anānd hōt.* (C.) (Nirmalacandra Caṭṭopādhyāya, 'Maharṣi Debendranāth')

(もしシャーンティニケタンの七葉樹の木陰に横になって、世間からはなれることができたのだったら、何と楽しいことであつただろう。)

もちろん、「条件」をあらわすための語句があるので、見分けはつく。(例1)において、

noile は条件分詞, jodi は条件節を導く接続詞である。条件節と帰結文ともこの Habitual Past が用いられるのが普通である。しかし、次例のように条件分詞があっても、過去の習慣をあらわすにすぎないものもある。

(例) bindu khuṣi thakile ṣṇṇṇṇurnake didi bolito, ragile bṛoginni bolito. (S.)

(Śaratcandra Caṭṭopādhyāya, 'Bindūr Chele')

(Bindu は嬉しいときには、Annapūrṇa を「姉さん」と呼び、怒ったときには、「奥さん」と呼んでいた。)

## II. Past Imperfect (Habitual Past) と Past Progressive

§ 4 過去において、ある動作や状態なりが習慣的または継続的に行われていたことをあらわすのが Past Imperfect であり、現在分詞に honaa の過去形 *thaa*<sup>10)</sup> (*the, thii, thii*) を加えた形式である。大体において、英語の *used to* や *would* 表現に当る。

(例) *esii baat kabhii mūh pēr nāhii laataa thaa*. (Jainendra Kumār, 'Sunītā')

(このようなことを決して口に出さなかったものだ。)

過去分詞に *kārnāa* を加えて「～するものだ」という習慣をあらわすから、この形は一層明確に「習慣」をあらわす。

(例) *hēr saal kaaliḡ kii chuṭṭiyō mē yeh lākii ko pāḥaayāa kārte the*. (Jainendra Kumār, 'Parakh')

(毎年大学の休暇には彼は少女を教えていたものだ。)

二つ以上の文章があって過去の状況を物語風に述べるときには、助動詞 *thaa* (*the, thii, thii*) が省略されるのが普通である。その結果、形の上では, Indefinite Imperfect と同じになる。

(例) *diindāyal jōb kabhii prāyag jāate, to jālpāa ke liye kōii nā kōii aabhuuṣaṇ zaruur jāate*.

(Premcand, 'Gaban')

(Dindayāl はアラハーバードへ行ったときにはいつでも, Jālpā のために必ず何か装身具をもってきたものだった。)

§ 5 Bengali では上例§ 3 の Habitual Past を用いる。

(例) *ei dighite lōke āka aṣite bhōy korito*. (S.) (Bāṅkimcandra Caṭṭopādhyāya, 'Indirā')

(人々はこの池へ一人でやってくるのを恐れていた。)

しかし、必ずしもこの形が過去の習慣をあらわすとは限らず、次例のように「願望」をあらわすこともある。

(例) *śabi bolilo, tor bouke ākbar dekhtam, tariṇi*. (C.) (Tārāśaṅkar Bandyopādhyāya, 'Tāriṇi Mājhi')

(Sabi はいった、「あんたの奥さん一度見たいわ、ターリニー」)

Hindi でいうところの条件法の一つとみてよいわけだが、§3のように「実現不能」のことをあらわすのではない。

§6 英語では知覚動詞は過去形であらわすが、Hindi や Bengali では、過去における感情や精神の継続状態は Past Imperfect (Habitual Past) であらわす。この点、フランス語の *Imparfait* (半過去) に似ている。

(例) *əpne šəriir kii bhuukh ko mē jaantaa thaa.* (Bhagvaticaraṇ Varmā, ‘Citralēkhā’)

(私は自分の体の渴望を知っていました。)

cf. I knew……. Je savais…….

*debendranathke o tini khub bhalobašiten.* (S.) (‘Maharṣi Debendranāth’)

(Debendranāth をも彼は大層愛していた。)

cf. He loved…. Il aimait…….

§7 Past Progressive<sup>17)</sup> は語根に *rəhaa thaa* (*rəhe the, rəhii thii, rəhii thii*) をつけ加えて作る。§4, §5 とのちがいは Past Imperfect (Habitual Past) が過去の状態・行為の始め終りをあまり考慮することなく、ある期間内それが続いていた事情をあらわすのに対し、Past Progressive は過去のある一時点に立って、その時点での動作・状態の進行中であることをあらわす。従って、時間的範囲という点では Past Progressive の方が限定されるわけである。

(例) *naav saṅgam ke kinaare ke paas aa rəhii thii, təbhii ekaaek suniitaa kii bāah pəkəṛkər śriikaant ne kəhaa,……* (‘Sunīta’)

(船がサンガム((ガンジス河とジャムナ河との合流点))の岸に近ずきつつあった。その時、とつぜん Sunīta の腕をとらえて、Śrikānt はいった、……)

次の二例は両者のちがいをよくあらわしている。

(例) *jəb mē ne ghər mē prəveš kiya təb vəh ciṭṭhii likh rəhaa thaa.*

(私が家の中に入った時、彼は手紙を書いていた。)

*jəb həṃ viśvavidyaalaya ke chaatr the təb həṃ bəhut ciṭṭhiyāa likhte the.*

(大学生の頃、我々は多くの手紙を書いていた。)

Bengali においても、

(例) *parboti o boi sleṭ loiya baṛi aṣitecilo.* (S.) (Śaratcandra Caṭṭopādhyāya, ‘Devadās’)

(Pārvatī もまた、本と石板をもって家へ帰りつつあった。)

において、たとえば「毎日」なら *aṣito* としたいところである。

しかし、両者の相違はつねにはっきりしているわけではなく、「状態の継続」をあらわす場合は両者はほとんど同じように用いられるといつてよい。

(例) usne zor se pukaarnaa caahaa, ‘həripṛəsənnə!’ lekin kinaaraa duur hotaa jaataa thaa  
əur əb iskaa cillaanaa maatr upəhaas hii hotaa. (‘Sunītā’)

(彼は大声で「Hariprasanna!」と叫ぼうとした。けれども、岸はだんだん遠くなって行き、  
もはや叫んだとしても、笑い草となっただけだろう。)

上例において、jaataa thaa は jaa rəhaa thaa に等しい。

### III. Past Contingent Imperfect

§8 現在分詞にさらに honaa の現在分詞をつけて作る。字義通りには、過去のある時点で生じた、あるいはしつつあった（そして完了していない）事柄の可能性を仮定するといういい方である。

(例) əgər vəh sotaa hotaa to use aawaaz nə sunaaii pərtii.

(もし彼がねむっていたのだったら、彼は声をきかなかったはずだ。((=起きていたからこそ、声をきいたのだ。)))

しかしながら、Semantic Ground としてはそうであっても、実際に用いられる頻度はひじょうに少なく、§1 の Indefinite Imperfect の形が用いられることが圧倒的に多い。上例では sotaa hotaa の代りに sotaa で十分である。現に帰結文では pərtii hotii とはなっていない。

### IV. Contingent Perfect

§9 過去分詞に honaa の Contingent Future の形 (hoūu, ho, hō) をつけて作る。過去のできごとの可能性を推量する場合に使う。「有り得ないこと」や「事実と反すること」を仮定するというのではない。

(例) əgər mujhse koi doṣ huaa ho to kṣəmaa kiijiye.

(もし私に落度があったのなら ((=落度があったかどうか分らぬが、そういうことが有り得たのなら)), 私をおゆるし下さい。)

bəhut sambahəv hɛ ki tətkaaliin kəthy bhāṣāa (praakrit) se samskrit ne isko grəhəṇ  
kiyaa ho. (Udayanārayaṇ Tiwārī, ‘Hindī Bhāṣā kā Udgam wa Vikās’)

(当時の俗語 ((プラークリット)) からサンスクリットがこれを取り入れたということは大いに有り得る。)

### V. Presumptive Perfect

§10 過去分詞に honaa の未来形 hūugaa, hogaa, hōge, hogii, hōgii etc. をつけて作る。過去のできごとについての可能性を §9 の Contingent Perfect よりも一層確実性をもって述べる場合に用いられる。

(例) tumne himaaləyə kaa naam zəruur sunaa hogaa.

(君はヒマラヤ山の名をきっときいたことであろう。)

vrikṣō kii puujaa bhii, niścāy hii, aaryō ne aarya-puuvr bhaaratiiyō se grāhṇ kii hogii.  
behuṭ sām̐bhāv ha, nādii kii puujaa bhii unhōne wāhii se grāhṇ kii ho.

(R. S. Dinkar, 'Samskṛti ke Cār Adhyāya')

(樹木を崇めることも、まぎれもなく、アーリア人がアーリア以前のインド人からとり入れたものであるのにちがいない。多分、川の崇拜もアーリア人は彼らから受け入れたのだろう。)

khudaa jaane, unkii kīaa haalət ho gāii hogii. ('A Grammar of the Hindustani Language')

(彼の状態がどうなったものか、誰も分らない。)

ところが、「過去」のみとは限らず、「現在」「未来」のことに関しても用いられることが頻度としてはひじょうに多い。これを Sandigd̐h Vartamān とみなすもの<sup>10)</sup>、Future Perfect という名称が与えられたりもする<sup>11)</sup> 所以である。

(例) bhuukh lāgii hogii to khaa hii legaa. (現在)

(He must be hungry, so he will eat it. — 'Teach Yourself Urdu')

ab baarēh bāje hōge. (現在)

(もう12時になったにちがいない。)

ham saat bāje wāhāa pāhūcēge tēb we log aa gāye hōge. (未来完了)

(我々はそこへ7時に着くだろうが、それまでに彼らは来ているにちがいない。)

§11 Bengali では—iya 分詞に thaka の Simple Future を加えて Future Perfect を作るが、これとても「過去」をあらわすか、または「未来」「現在」かは Context によって判断しなければならない。

(例) tōbe tumi si nigur̐h biśoye jukti upāsthit koriya thakibe. (S.)

(Rām Mohan Rāy, 'Pādarī o Śiṣya Sambād')

(それでは君はこの深遠なる問題について、熟考を重ねたことだろう。)

pāthśālāy giye bōṣe thakbi. (C.) ('Bindūr Chele')

(あんた、学校へ行って座っているのでしょうか。)

## VI. Indefinite Perfect (Simple Past)

§12 Hindi や Bengali の term, 'Sāmānya Bhūt' または 'Sādhāraṇ Bhūt' というのは「普通の過去」という意味であり、Simple Past というのはその英訳かと思われる。しかし、注意すべきは 'simple' という term は他の完了形とちがって、迂言的表現を用いず、一語であらわすという意味(つまり、compound の対として)でもあり得る。要は、形態上の 'simple' ほどには本時制の意味するものは 'simple' ではない。



過去形は本来、話者の陳述の瞬間に関係なく、過去の行為・状態をあらわすのは、すべての言語について普遍的事実であろう。従って、時間の範囲という点では過去に対して無限の広がりをもつが、一方、往々にして「現在」や「近い未来」をあらわすことがあるのは Hindi や Bengali の特徴であって、英語の直接法ではこういう用法はない。<sup>20)</sup>

(例) əb rəhii tumhaarī baar. (=現在)

(さあ、今度は君の番だ。)

tomar nēmāntonno roilo. (C.) (=現在) (Upendraāsth Dās, ‘Śāhare Indūr o Geyo Indūr’)

(君は招待されている。)

dekhiye, kitnaa waqt ho gəyaa hē, əcchaa, mē cəlii. (=近い未来) (Jainendra Kumār, ‘Kalyāṇī’)

(何時になったかごらん。私、出かけるわ。)

ami tōbē colilam. (S.) (=近い未来) (‘Gorā’)

(それでは、私はいとまごいをしましょう。)

近い未来といっても、多少「意志」を伴っているので、通例 1 人称に限って用いられるようである。

Hindi では条件節の中で過去形が「未来」の代りとして用いられることがある。

(例) bhəgvaan ne vāh sāmāy diyaa to mē svəyām əpne pər ləgaa səb rupəyaa bebaak kər dūugaa. (Jainendra Kumār, ‘Bite Diā’)

(神がその時を与えてくれるなら、私は自分に課せられたお金を全部自分で返済しましょう。)

そうでない場合も無論ある。帰結文の動詞で判断すべきである。

(例) əgər usne kiyaa to koi nāi baat nāhi kii. (過去) (Premcand, ‘Karmbhūmi’)

(もし彼がしたのなら、何も新しいことをしたわけではない。)

yədi əkele hue əur khaalii hue to śriikaant saamne diiwaar mē ekṭək dekhte hue sāas lete hē, əur uṭhkər ṭəhəlne ləgte hē. (現在) (‘Sunītā’)

(一人で暇なときには、Śrikānt は前の壁をじっと見つめながら息をし、そして立ち上って歩きまわりはじめるのである。)

§13 §12とは逆に、「過去」の事柄をあらわすのに、現在形でもっていいあらわすことがある。これは、過去のでき事を話者または筆者が単なる回想としてではなく、現在なお眼前に転回するものの如くに判断するというわけだから、生き生きとした描写がされるという効果がある。

(例) ghəṛii mē kuch sāmāy thaa əur turənt vāh ṣṭeṣən pər bhaagaa, pər pletfaarm pər pəhūctaa hē ki gaarīi chuutṭ gəii. (‘Sunītā’)

(時計を見るといっくら時間があつたので、ただちに駅へ急いだ。しかし、プラットフォームに着くや否や、列車が発車した。)

いわゆる「歴史的現在」<sup>21)</sup>もそういう心的態度にもとづくものであろう。

(例) gāadhii jii kāhte hē ki sēcchii əhimsaa bhəy nəhii, prem se jənm letii hē.

(ガーンディ翁は「真の非暴力とは恐れからではなく、愛から生れるのだ」といっている。)

Bengali ではもっとひんばんに用いられる。

(例) atharō šō āši khristabde anāndmōth prakaṣit hōy. (S. & C.)

(西暦1880年に「アーナンドマト」が出版された。)

debendronather boyōṣ jōkhon ekuṣ bōchor, didima tār mara jan. (C.) ('Mahaṣi Deben-dranāth')

(Debendranāth が21才のとき、彼の祖母が亡くなった。)

ただ Bengali の場合、話者または筆者のそのような心的態度とは別に、Copula が省略されるという疑古的文体性とも関わりがあると思われる。上例において、ekuṣ bōchor の後に chilo(であった)が省略されている。

## VII. Past Perfect

§14 Past Perfect は Hindi では過去分詞(つまり過去形)に honaa の過去形 thaa (the, thii, thii) を添え、Bengali では -iya 分詞に hōwa の過去形 achilam<sup>22)</sup> (achilo, achils, achilen) を添えて作る。Pluperfect<sup>23)</sup> とか Remote Perfect<sup>24)</sup> とかいわれるように、「過去以前」のでき事をあらわす。

(例) tiin saal se uupər ho gəye jəb tumhaaraa pətr aayaa thaa. ('Sunitā')

(君の手紙が来てから三年以上たった。)

bijgupt ruk gəyaa, šaayəd vāh aage ke šəbdō ko ḍhūṛhne ləgaa thaa. ('Citralekhā')

(Bijgupt はつまった。多分、次の言葉をさがし始めていたのだろう。)

je poth giyacilo tahara tin dine, phiribar šomoy šei poth otikrom korilo dui dine. (S.)  
(‘Tāriṇi Mājhi’)

(三日かかって行った道のりを、帰るときは彼らは二日で終えた。)

kabuliwalar šohit minir je din prothom sakhat hoiyachilo, amar šei diner kotha mone porilo. (S.) (Rabindranath Tagore, ‘Kābuliwālā’)

(Mini がカーブル商人とはじめて会った日のことが私に想い出された。)

§15 英語における過去完了は Language as Code (規範言語)としては、単独の文章を成しえても、Language as Speech (運用言語)という面では、甚だ不完全で、過去をあらわす副詞語句か、あるいは過去完了形を必要とするだけの文脈のくみとれる文句を配して、場の設定が用意されなくてはならない。<sup>25)</sup>たとえば、I had written a letter. という文章は運用言語の面では、いかにも不十分であり、when you came とか、before that day というような文章または句があ

ってはじめて過去完了形が生きてくる。つまり、何らかの「過去」の基準がつねに明記されるか、あるいは聞き手または読者にそういう状況が納得されておかなければならない。しかし、Hindi, Bengali とも、過去完了形に「過去」の基準は不要で、聞き手または読者の了解もいらない。「現在」の時点で筆者または話者が過去のでき事を回想し、その時間的へだたりが比較的長いものと、筆者または話者の主観で判断したときに用いられるのである。mẽ ne ciṭṭhii likhii thii. (私は手紙を書いた。) は単独で十分「生きた」文章たりうるわけである。時間的へだたりの感覚は全く筆者または話者の主観によるわけだから、たとえば mẽ ne dəs saal pəhle ciṭṭhii likhii thii. (私は十年前に手紙を書いた。) でも、mẽ ne aaj səwere ciṭṭhii likhii thii. (私は今朝手紙を書いた。) でもよいわけである。

(例) kəl aap kəhāa gəye the? (あなたは昨日、どこへ行かれましたか。)

kal apni kothay giyacilen? (S.) (同)

英語では決して、Where had you gone yesterday? とはいわないだろう。<sup>50)</sup>

従って、Hindi, Bengali 共、過去完了の使用頻度はきわめて高く、英語の過去時制をも包含した機能をするものといってよい。

(例) təb uskaa haath thaamkər śriikaant ne gəmbhīrr vaanīi mē kəhaa thaa,... ('Sunīta')

(Then Śrikant said in a deep voice, grasping his hand.....)

tahar gha theke ōnek rōktō poriyacilō. (S.) ('Basic Secondary Vocabulary' Dacca)

(Much blood flowed from his wound.)

Bengali のある学習書<sup>7)</sup>では、この過去完了を Sāmānya Atīt Kāl (Simle Past) として扱い、従来の Simple Past (Sādharan Atīt) 形を全く除外しているほどである。もちろん、Simple Past 形を無視してしまうのは行きすぎだが。

§16 əbhīi aayaa thaa. (今来たところだ) のように əbhīi (今しがた) と共に用いられると、過去完了はひじょうに「現在」に近い時間をあらわす。説明し難い現象だが、蓋し、副詞の əbhīi がほとんど現在と切離すことのできないほどごく近い時をあらわすのでそれにつられての一種の「強勢」とみれないだろうか。次のような用例もある。

(例) əbhīi to pərsō gəye the. (Premcand, 'Godān')

(おまえ、ほんのおととい行ったとこじゃないか。)

しかし、Bengali ではこのような用法は見出せない。

## VIII. Present Perfect

§17 Present Perfect は Hindi では過去分詞に honaa の現在形 hūu (hə, hē, ho) を添え、Bengali では -iya 分詞に ach の現在形 ache (achi, acho, achen) を添えて作る。いずれも、形の上では、過去完了が英語の had+P. P. と対応しているように、英語の have (has)+P. P. と

たまたま対応しているが (have 動詞と be 動詞のちがいは別として), その用法とインド・パキスタンの native speaker の意識は英語のそれと同一でないことに注意しなければいけない。

従来の文法書には, ほとんど例外なく, 「現在完了は過去において起った動作や状態の結果が現在に及んでいることをあらわす」というふうに説かれている<sup>28)</sup>が, このような定義で, 現在完了の文法範疇を規定することに私は大きな疑問をもつ。なぜなら, 過去の行為や状態の結果が現在に及んでいるのは現在完了とは限らず, 過去完了でも「現在」に及ぶことはある。<sup>29)</sup>

(例) raam kəthaa nə kevel bhaaratīiy vərəṇ eṣiyāaii saṁskṛiti kaa bhii ek mähətvəpuṛṇ təttv bən gāii thii. ('Saṁskṛti ke Cār Adhyāya')

(ラームの物語はインドだけではなく, アジア文化の重要な要素ともなった。)

また, 現在完了がつねに「現在」に及んでいるとは限らない。

(例) mē ne tumse prem kiyaa hē, əur əb bhii kərtii hūu. ('Citralakhā')

(私はあなたを愛した。そして, 今も愛している。)

“amra chelebəla theke ækšoṅge pərechi.” (C.)

“ækhono o poren?”

“na ækhon ar porī na.” ('Gorā')

(「僕達は幼少の頃から一緒に勉強したんだ。」)

「今も一緒にしてるの。」

「いや, もうしてない。」)

上例の二文において, もし「現在」にも及んでいるのであれば, 「今も……」という文は起りえないはずである。また, 次のような例文は, 現在完了が「過去」の一種にすぎないことを示している。

(例) həm log dəs saal tək kəlkətte mē saath rəhe hē.<sup>30)</sup>

(我々は十年間, カルカッタと一緒に住んだ。)

cf. We have lived together in Calcutta for ten years. は「今も住んでいる」ことになる。

səbhyətāa kaa aarəmbh yuunaan əur philistiin mē huāa hē. ('Saṁskṛti ke Cār Adhyāya')

(文明はギリシヤとパレスチナにはじまった。)

aṭ bəyoše šbošurbaṛi giyaci. (S.) ('Gorā,')

(8才のとき, 舅の家へ行った。)

tini jəkhon mrittušojay tokhono o bar bar bəlechen. (C.) ('Mahaṛṣi Debendranāth')

(彼は死の床にあったときも, 何度も何度も言った。)

英語とちがって, 重点はあくまで「過去」にあるのだから, 当然「過去」をあらわす副詞と共に用いられる。<sup>31)</sup>

(例) kəl mē unse pəhlii baar milaa hūu.

(昨日, 私ははじめて彼に会いました。)

(cf. Yesterday I met him for the first time.

Gestern habe ich ihn zum ersten Male gesehen.

Hier je l' ai vu une première fois.)

kal o tomakṣ bōlēchi, amar aṭṭar age dudh cai. (C.) ('Bindūr Chele')

(昨日も言ったじゃないの, 「8時までにはミルクがいるのよ。」)

(cf. I said to you…… Ich habe Ihnen gesagt…… Je vous ai parlé……)

従って、機能の点からすると、「現在完了」(Pūrṇ Vartamān) よりも「近い過去」(Āsanna Bhūt) という名称の方がよりふさわしいと私は考える。

§18 過去分詞は Hindi にあっては、そのままの形で Past Tense にもなったが、一方、過去分詞というのは元来、形容詞的限定詞としての機能をもっている。こうした過去分詞に hūu, hē, hē. ho. のついたものは「現在完了形」をしていても、意味は「現在完了」ではなく、形容詞に Copula としての hūu, hē, ho がついたものにすぎないので「現在」をあらわすのは当然である。これを「現在完了」と混同してはいけない。<sup>32)</sup>

(例) yəhāa unke vaadyə-yəṇṭr rəkkhe hē, yəhāa kitaabē rəkkhii hē, yəhāa tāsviirē təṅgii hē. ('Sunītā')

(ここに、彼の楽器がおかれている。ここに本がおかれておりここに絵がかかっている。)

us əgyaat əndhkaar ke gərtt mē kīaa chipaa hē? ('Citralēkhā')

(あの知られざる暗闇の奥に何がかくされているか。)

vəh khəraa hē. (彼は立っている)において、hē の代りに huāa をもってすれば、「立った」という動作をあらわすことになり、thaa をもってすれば「立っていた」と過去の状態をあらわす。

Bengali でも -iya 分詞+ache (achi, achō, achen) において、ache etc. は単なる Copula にすぎない場合がある。

(例) maya əkhəno o mən bhoriya ache. (S.) ('Gorā')

(迷いがなお、心に満ちている。)

poṣṭmaṣṭar ottonto onnəmonəṣkəbhabe coukite boṣiya oṭhoba khaṭiyay ṣuiya achen. (S.)

(Rabindranath Tagore, 'Post Master')

(局長さんは大層無関心な様子で、寝台の上にすわったり、あるいは小さな寝台に横になったりしている。)

tariṇi ṭhai jagiya boṣiya ache. (S.) ('Tāriṇi Mājhi')

(ターリニーはその場で目覚めたまま、すわっている。)

boṣiya の後に achen が略されている。boṣa の Simple Past 形をもてすれば、「座った」という動作があらわれ、-iya 分詞に ache etc. の過去形 achilo…etc. を添えると(形は過去完了だが)過去の状態をあらわす。

(例) ækdol lok gramer dhare gachtolay bošiya chilo. (S.) ('Tāriṇi Mājhi')

(一群の人々が村のはずれの木の下にすわっていた。)

ækjən puruṣ jatri chata khuliya bošilo. (S.) ('Tāriṇi Mājhi')

(一人の男の巡礼が傘をひろげてすわった。)

dāṛa (立つ) の場合も同様である。

(例) omullo bhōye biborṇo hoiya dāraiya achē. (S.) ('Bindūr Chele')

(Amūlya は恐しさの余り、まっさおになって立っている。)

še sleṣṭ hate uṭhiya dārailo. (S.) ('Devadās')

(彼は石板を手にして、ふと立ち上った。)

ṭhik bonnar joler dhareṣi še dāraiya chilo. (S.) ('Tāriṇi Mājhi')

(彼はまさしく洪水のあふれた岸の上に立っていた。)

#### IX. Past, Past Perfect, Present Perfect の対立

§19 §17において、「現在完了」は必ずしも「現在」とつながりのあるものではなく、話者または筆者の意識の中ではやはり「過去」に重点があるわけで、「過去時制」の一種であると述べた。それでは、Past, Past Perfect, Present Perfect の対立関係をどのようにとらえるべきであろうか。私は、現在なり過去なりへの結果の波及というとらえ方ではなく、話者または筆者の「過去」への時間的へだたりに対する主観的心的態度の相対性の相違に求めたい。

すなわち、Past Perfect が相対的な時間のへだたりという点では一番「遠い」過去であることは疑いないとして、問題なのは Past と Present Perfect の関係である。

(例1) səwere wəhāa pəhūcaa to maalum huaa, həriprasənnə usii saat baje kii ekspres se delhii cəl diyaa hē. ('Sunitā')

(朝そこに着いてみると、Hariprasanna が7時の急行でデリーへ去った後であることが分かった。)

(例2) "sunaa kuch? bihaarii ne vyaah kər liyaa hē." ('Parakh')

(ちょっときいたかい、Bihārī が結婚したことを。)

例1においては、デリーへ「立った」瞬間は「到着し」、「分った」瞬間より前のことであり、例2においては、「きいた」瞬間より「結婚した」時点の方が前である。さらに、

(例) merii pətnii misez əsraanii se milii ṭhii, əur bhii yəhāa kii prəmukh məhilaaē unse milii hē. ('Kalyāṇi')

(私の妻は、Asrānī 夫人に会ったし、そしてさらに、この主だったご婦人達に会っている。)において、もしさらに「今日彼女は……に会った」と続くのなら、aaj……se milii としたいところであろう。Past Tense は「過去」とはいいながら、英語とちがってひじょうに「現在」と関わりのあるものである。

(例) vāh to əbhii əbhii yāhāa rāhne lāgaa.

(He has only recently begun to live here. ('Teach Yourself Urdu') )

Bengali の場合をみてみよう。

(例) hoṭhat jōkhon tar khear hōlo, tōkhon śomoy utre gāchē. (C.) (Rabindranath Tagore, 'Meghmālā')

(ふと気がついたときには、もう時間は過ぎていた。)

śokalbālay amar nōbheler śoptodōś poricchede hat diyaci emon śomoy mini aśiyai arāmbh koriya dilo, "baba……" (S.) ('Kābulīwālā')

(朝、私が小説の7章に手をつけたとき、Mini がやってきて、しゃべりはじめた、「お父さん……………」)

いずれも Present Perfect の方が Past よりも古い時点の事柄をあらわしていることが分る。

Bengali でも Simple Past はきわめて「現在」に近づくことが多い。

(例) ami boro muškilsī poṛilam. (S.) ('Gorā')

(私は大きな困難に陥入った。(=困ったことだ))

aj ami kōlpotōru hōlam. (C.) ('Maharṣi Debendranāth')

(今日、私は「幸福の木」(何でも望みをかなえてくれる木) となった。)

このように、従来、英文法の影響による誤れる観念により、見落されてきたことであるが、3つの時制の対立関係にあっては、Past Perfect が「遠い」過去をあらわし、Present Perfect が「中間の」過去をあらわし、Past が「近い」過去をあらわすことが多いのである。

§20 Hindi の Present Perfect や Past Perfect の形式が、2つの動詞要素から成り立つことは Bengali よりも一層はっきりしている。今、過去分詞をPであらわし、補助的動詞 (he, thaa 等) をAであらわすと、2つ以上の文章が並列的に用いられる場合、つまり (P<sub>1</sub>+A)+(P<sub>2</sub>+A)+(P<sub>3</sub>+A)……においては、最後の文章を除いてAは省略されることが多い。すなわち、P<sub>1</sub>+P<sub>2</sub>+P<sub>3</sub>+A となる。

(例) hariprasānnā unke saath milaa (P<sub>1</sub>), bolaa (P<sub>2</sub>) āthvāa hāsaa (P<sub>3</sub>) he (A). ('Sunītā')

(Hariprasanna は彼と会い、語ったり、笑ったりした。)

このような場合、Past Indefinite と Perfect Tenses の対立はなくなるとみてよい。

§21 Hindi の否定詞 nāhii と nā のちがいは、あらゆる叙想法においては nā しか用いられないのに対して、直接法と命令法にあってはいずれも用いられる。発生的には nāhii<sup>39)</sup> は nā+ho であって、つまり、be 動詞を含んだ否定詞であるから、Present Imperfect においては hūu, hē, hē, ho が省略される。たとえば、mē nāhii jaantaa hūu. (私は知らない) において、助動詞 hūu は通常省かれる。

しかし、*nəhii* の代りに *nə* をもってすれば Indefinite Imperfect となって、「もし私が知らなかったとしたら（実際は知っているのだが）」という意味になるので *nəhii* と *nə* の区別は重要である。しかし、過去時制の否定についても、形式上のちがいがあるからといって、*nə* と *nəhii* のちがいを意味の相違にまで及ぼそうとする考え方は正しくないであろう。

たとえば、*nə gəyaa* と *nəhii gəyaa* の 2 文について、前者は「過去時制」の打消しだから *He did not go.*, 後者は *nəhii* の中に *he* が含まれているから、*gəyaa he* すなわち「現在完了時制」の否定であって、*He has not gone.* というちがいがあると説く文法書<sup>30)</sup>があるが、これは全く皮相的な見方であって、実際には両者の間には何らの本質的な意味上の相違を見出すことができないのが事実であって、強いていえば、Syllable の点からして、*nəhii* の方がやや強いというぐらいのことであろう。P + Aにおいて、*nəhii* がつけば（通常Pの前に位置する）Aは省略され、その結果、Past, Past Perfect, Present Perfect の対立関係はなくなるとみてよい。

(例) *tumhaarī baat mē nəhī sāmājh sēkaa.* ('Ajātaśatru')

(私はおまえのということが理解できなかった。)

Bengali の場合、否定文にあっては、Present Perfect と Past Perfect の「形式上の」区別すらなくなる。すなわち、Simple Present に否定詞 *nai*<sup>30)</sup> (口語では *ni*) をつけたものが、完了の否定文となる。

(例) *kalacād aše nai.* (S.) ('Tārīnī Mājhī') (*Kalācānd* は来なかった。)

(注. *ašiyache* または *ašiyacilo* の否定。 *ašiyache na* とか *ašiyacilo na* とは決していわない。)

*e šob kotha ami kōkhōno purbe šuni ni ebōm bhabī ni.* (C.) ('Gorā')

(これらすべての事を私は以前に一度もきかなかったし、考えもしなかった。)

(注. それぞれ、*šuncī* または *šuncilam*, *bhebecilam* または *bhebeci* の否定であって、*šuncī na*, *šuncilam na*, *bhebecilam na*, *bhebeci na* とは決していわない。)

Simple Past の打消しは否定詞 *na* をつける。

(例) *šukhi kono uttār dilo na.* (S.) ('Tārīnī Mājhī')

(*šukhi* は何も答えなかった。)

しかし、ここでも Simple Past と Perfect Tenses の対立を見出すことはできない。

(例) *še sobiššoye prāśno korilo, "ghumoo nai tumi?"* (S.)

*hašiya tārīnī bolilo, "na, ghum elōna."* (C.) ('Tārīnī Mājhī')

(彼女はおどろいてたずねた、「おまえさん、寝なかったの」)

ターリーニーは笑いながらいった、「うん、ねむれなかった」)

上例において、*ghumoo nai* の代りに *ghumilo na* をもってしても、*elo na* の代りに *aše ni* をもってしても、何ら意味上の相違は生じない。

このように、Hindi (Urdu), Bengali 共、否定文については Past, Past Perfect, Present Perfect の対立関係はなくなるとみてよいだろう。



## お わ り に

「時間意識の言語表現に整然たる形式上の統一を期待することはできない。」<sup>30)</sup> Kellogg の分類法にじても余りにも metaphysical であるとの批判もある。<sup>37)</sup> 自ら、文法には限界があるわけだが、しかし「生きた」言語について、その機能の面から従来の文法の限界に挑むのは無意味ではなからう。現代インド語の動詞時制については、なお判然としないところが多いわけだが、少くともその問題点を本稿で指摘し、とくに Past, Past Perfect, Present Perfect の3つの時制については筆者の新しい考え方をのべたつもりである。

今後、動詞時制の発達を少くとも18世紀後半までさかのぼって、歴史的に眺めてみる必要があるであろう。

## 註

- 1) 'A Grammar of the Hindi Language', London 1965, p.228
- 2) ここでいうヒンディー語とは、いわゆる「標準カーリーボーリー・ヒンディー」のことであり、本稿での対象はさらにその散文体に限られる。
- 3) ヒンディー語の term. *kāl* は「時」を意味する。以下 *Kāl* は省略。 *Kāmtāprasād Guru*, 'Hindi Vyākaraṇ', Banaras, p.p.459—471 による。
- 4) *aanaa* (来る) の1人称男性単数形を例示した。以下同様。(但し、(1)の③を除く)
- 5) 2人称単数形。
- 6) 2人称複数形。
- 7) *Jagdischandra Ghosh*, 'Ādhunik Baṅglā Vyākaraṇ', Calcutta 1373 (ベンガル暦) による。
- 8) ベンガル語の term. 以下 *Kāl* は省略。
- 9) *kōra* (する) の1人称の活用形を例示した。なお、ベンガル語では性、数によって動詞は変化しない。また、文語体 (*Sādhū Bhāṣā*) を掲げた。
- 10) ヒンディー語とウルドゥ語のちがいは、文字と語彙の点に見出されるだけで、文法的にはほとんど同じであって、なにかんづく動詞については何らの本質的相違はないものとみてよい。従って、筆者の専門上、ヒンディー語文献への偏りはやむをえないが、ウルドゥ語はヒンディー語に準ずるものとみてさしつかえなからう。
- 11) ベンガル語について、文語体 (*Sādhū Bhāṣā*) と口語体 (*Calit Bhāṣā*) のちがいが認められるが、本稿の例文中、*Sādhū Bhāṣā* を (S.) であらわし、*Calit Bhāṣā* を (C.) であらわすことにする。(S.) (C.) のないものが、ヒンディー語またはウルドゥ語の文例である。

\*厳密には、これらは「法」に関するものである。すなわち、\*印中、(1)の③は命令法であり、他は叙想法である。

† 補助的動詞を必要とせず、一語で時制をあらわすという意味で、これらを *Sādhāraṇ Kāl* (Simple Tenses) といい、他は補助的動詞 (*Sahāyak Kriyā*) を必要とするので、*Saṁyukt Kāl* (Compound Tenses) といわれる。

†† ヒンディー語の場合と同様、これらを Saral Kāl または Maulik Kāl (Simple Tenses) といい、他を Miśra Kāl または Yaugik Kāl (Compound Tenses) という。(2)の②と③、および(3)の②と④は一見、一語でできているようだが、次のように分けられる。

koriteci=korite+aci, koriyaci=koriya+aci,

koritecilam=korite+acilam, koriyacilam=koriya+acilam.

- 12) J. T. Platts, 'A Grammar of the Hindustani or Urdu Language', Delhi 1967, p.368
- 13) op. cit., p.368
- 14) T. Grahame Bailey, 'Teach Yourself Urdu', London 1960, p.100
- 15) ベンガル語には、直接法と命令法しかない。
- 16) honaa の過去形にはもう一つ huaa がある。語源的には huaa はサンスクリットの √bhū より派生したもので、主に「生起」をあらわすのに対し, thaa は√sthā より派生したもので、主に「存在」「断定」をあらわす。
- 17) Past Imperfect の第2型とみなす見方もある。('Teach Yourself Urdu' p.43)
- 18) Margot Hälsig, 'Grammatisher Leitfaden des Hindi', Leipzig 1967, p.98
- 19) J. T. Platts, op. cit., p.149
- 20) "The past non-perfect refers to a similar time in the past, which may overlap an indicated point of time in the past; it does not extend to the present."  
(F. R. Palmer, 'A Linguistic Study of the English Verb. 'London 1965, p.61)
- 21) "The traditional explanation of this usage — that it recalls or recounts the past as vividly as if it were present, is adequate. It seems highly probable that it is not specifically English but a characteristic of many if not all languages that make time distinctions in the verb."  
(F. R. Palmer, op. cit., p.69)
- 22) hōwa の過去形にはもう一つ hoilo がある。これはサンスクリット√bhū より派生し、主に「生起」をあらわすのに対して, achilo は√as から派生し、主に「存在」「断定」をあらわす。  
なお、この Past Perfect にかぎらず、二つの動詞要素を用いて時制をあらわすようになったのは Hindi, Bengali とも近代になってからである。  
(Dhirendra Varmā, 'Hindi Bhāṣā kā Itihās', Allahabad 1962, p.304,  
Sukumār Sen, 'Bhāṣār Itivṛtti', Calcutta 1965, p.211)
- 23) 'Teach Yourself Urdu' p.51
- 24) 'A Grammar of the Hindustani Language' p.145
- 25) Question Box series, VI. 'Tense, Mood, Voice' p.57
- 26) しかし、インド人やパキスタン人の意識で英語を眺めると、そういう表現は「許される」わけで、実際、多くのインド人やパキスタン人はそのようないい方をするし、書きもする。たとえば, 'Saral Hindi Vyākaraṇ' (Dakṣiṇ Bhārat Hindi Pracār Sabhā, Madras) p.45
- 27) Bidhubhūṣan Dāsgupt, 'Learn Bengali Yourself' Calcutta 1966
- 28) S. H. Kellogg, op. cit., p.474

- Kāmtāprasād Guru, op. cit., p.468
- J. T. Platts, op. cit., p.355
- 沢 英三 「インド文典」, 東京 1960, p.132
- Z. M. Dymashiz, 'Hindī Vyākaraṇ ki Rūprekhā', Delhi 1966, p.143
- Margot Hälsig, op. cit., p.93
- Jagdiścandra Ghoṣ, op. cit., p.154 等。
- 29) この点, Margot Hälsig の次の見解(下線部分)は訂正されなければならない。  
 “Das Plusquamperfekt bezeichnet zunächst eine Handlung, die in ferner Vergangenheit vollzogen worden ist und keinen Bezug zur Gegenwart oder zum Sprecher hat.”  
 (‘Grammatisher Leitfaden des Hindī’ p.95)
- 30) 但し, rəhnaaが to live, to stay の意味でなく, to be とほとんど同じ意味に用いられる場合は「現在」とも関わりがある。  
 (例) hinduḍ kaa viśvaas śeriir pər kəm, aatmaa pər ədhik rəhaa hē. (‘Saṃskṛti ke Cār Adhyāya’)  
 (ヒンドゥ教徒達は肉体よりも精神により多く信頼をよせてきた。)
- 31) この点, 「過去を示す副詞とは一緒に用いられない」とする沢英三氏の見解(「インド文典」 p.132)は訂正されなければならない。
- 32) 「インド文典」(p.132)で, kiaa aaj daaṛhaanaa khulaa he? (今日, 郵便局は開いていますか。)  
 を現在完了の一例としてあげてあるのは正しくない。
- 33) S. K. Chatterji によると, nahii の etymology は次の通りである。  
 asti>\* asati>na ahai>nāhi  
 (‘The Origin and Development of the Bengali Language’, Calcutta 1926, p.1039)
- 34) ‘Teach Yourself Urdu’ p.120
- 35) Sukumār Sen によると nai の etymology は次の通りである。  
 (サンスクリット) nāsīt>(古期ベンガル語) nāhi>(現代ベンガル語) nāi  
 一方, 同じく nai で「……がない」と非存在の意をあらわすもの(この場合の口語体は nei)はサンスクリットの nāsti から来たものである(‘Bhāṣār Itivṛtti’, p.204)から両者を混同してはいけなない。  
 (例) keho kothao nai. (‘Tārini Majhi’) (誰もどこにもいない。)
- 36) 中島 文雄 「文法の原理」(研究社) p.199
- 37) John Beams, ‘Comparative Grammar of the Modern Aryan Languages of India’, Delhi 1966, Vol. III, p.100